

復活節第四主日（A年）のみことばの典礼の解説

典礼的背景

1. 「良い牧者の主日」

復活節第四主日は、(A, B, C年必ず) ヨハネ福音書第10章の良い羊飼いと羊のたとえが朗読されるので、典礼暦上の名称ではないが、伝統的に「良い牧者の主日」と呼ばれてきた。福音朗読だけでなく、各年共通に用いるミサの集会祈願・拝領祈願・拝領唱なども、良い牧者キリストの姿を想起させる。

2. 世界召命祈願日

1964年以降、復活節第四主日は「世界召命祈願の日」と定められ、司祭や修道者を志す人の召命のために祈るとともに、すべてのキリスト者が自らに向けられた神からの招きについても思い起こす日となっている。

第1朗読 使徒言行録 2・14a, 36-41

イエスを、神は主とし、またメシアとなさった

02:14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「02:36 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」02:37 人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。02:38 すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。02:39 この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」02:40 ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。02:41 ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。

【解説】 ほぼ先週の朗読箇所が続く部分。聖霊が降った後の使徒ペトロの長い説教(2:12-42)の最後の部分に当たり、先週朗読されたペトロの説教を聞いた人々の反応が読まれる。ケリュグマ¹を大々的に宣言するペトロに対し、人々は「わたしたちはどうしたらよいのですか」と問う。一説によると、ルカ時代の洗礼志願者のカテキズムを反映していると言われる(16:30, 22:10)。ペトロは以下のように悔い改めの勧告と救いの宣言をする(38節)。①悔い改め、②イエス・キリストの名による洗礼の勧告、③罪のゆるし、④聖霊の賜物の約束。この約束は「あなた方(ユダヤ人)」にも「遠くにいるすべての人(異邦人)」にも与えられる。福音はすべての人にもたらされるのである。

¹ 最初の告げられた(宣教された)内容：具体的には、使徒たちが宣教した使信の内容を指す。

第2朗読 一ペトロ 2・20b-25

あなたがたは魂の牧者である方のところへ戻って来た

2・20b 善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。02:21 あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。02:22 「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」02:23 ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。02:24 そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担って下さいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。02:25 あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

【解説】先週に引き続き、ペトロの手紙Ⅰからの朗読。これまで述べてきた通り、この手紙は初代教会の洗礼式の説教がもとになったと言われており、要理教育的内容と迫害に苦しむ信徒を励ますメッセージを携えている。今日の箇所では、迫害の時代のみならず、すべての時代の人々が体験する“不当な苦しみを”耐え忍ぶこと、しかも善を行って耐え忍ぶことが勧告されている。模範となるのはキリストであり、「罪を犯さず、偽りを述べなかった」キリストは、苦難の中でも黙って耐え忍んで、正しくお裁きになる方にすべてを任せられた²。それは、人の批判や暴言に左右されずに、ただ黙って耐え忍びながら神の裁きに身をゆだねる生き方³だったが、それは、「あなた方(キリスト者)」がその足跡に続くためだったとペトロは説く。このようにして、キリスト者にとって善とは何であるかが示されている。最後は、おそらく本日の“良き牧者の日”に朗読される理由であろう 25 節の「あなたがたは羊のようにさまよっていたが、今は、魂の牧者、監督者である方のところへ戻って来た」という言葉で締めくくられる。「羊たちが戻ってきた」ことよりも、「キリストの傷によっていやされたこと(24 節)」、「そのことによって罪に死に義に生きることができるようになった」ことに論点の重みがあり、羊である私たちの努力や行いに先行するキリストの業とその恵みの方が大いに強調されていることを忘れてはならない。

福音朗読 ヨハネ 10・1-10

わたしは羊の門である

10:01 「はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。10:02 門から入る者が羊飼いである。10:03 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。10:04 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。10:05 しかし、ほかの者には決してついて行か

² この生き方はイザヤ書に描かれる「主の僕」の生き方である。「主の僕」については以下のイザヤ書参照：①42 章 1～4 節、②49 章 1～6 節、③50 章 4～9 節、④52 章 13 節～53 章 12 節

³ 同上

ず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」10:06 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。10:07 イエスはまた言われた。「はっきりしておく。わたしは羊の門である。10:08 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。10:09 わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10:10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

【解説】ヨハネ福音書 10 章は「羊飼いと羊のたとえ」の章である。上述した通り、復活節第四主日に毎年この章から朗読される。そこで、いくつかの要点を概説しておく。

1. ヨハネ福音書の「たとえ話」

まず、ヨハネ福音書には“たとえ話”そのものが、この「羊飼いと羊」の 10 章と「ぶどうの木」の 15 章のほかにはない。成立年代が四福音書中最後とされるヨハネがたとえ話の伝承を知らなかったはずはないと思われるが、それについてもはっきりとした回答はない。イエスのたとえ話の伝承を知っていたとしても、“しるし”に重要性を置いているヨハネは、イエスの活動を中心に描くことでそれを示したかったのかもしれない。

2. ヨハネ福音書 10 章の下地となっているもの、背景

ヨハネの 10 章の下地には、旧約のエゼキエル書の 34 章「イスラエルの牧者」が、続く 11 章の「ラザロのよみがえり」の下地には同書の 37 章「枯れた骨の復活」があり、ヨハネ福音記者の連想があることも想定できる。

次に、この 10 章のバックグラウンドである。羊飼いと羊の表象は私たち現代の日本人にとってなじみ深いものではない。根本的に聖書に出てくる動物は動物園に行かなければ見られないので、日常生活にあるものではない。その点、イエスの、特にたとえ話において使われる表象や題材は、当時のユダヤ人たちの日常の中にあつたもので、彼らにとって一番身近なものであつたことをよく心に留める必要がある(特に自然や動物など)。現在でもパレスチナの郊外に行けば、羊飼いが羊を連れて歩いている姿を目にすることができる。パレスチナの牧畜、遊牧生活とは一般的に以下のようなものである。朝、羊飼いたちは自分に委託されている主人の羊を囲いから連れ出し、緑の牧草を食べさせ、運動させ、また水の流れへ導き、渴きをいやし、夕方には主人の囲いへ連れ帰る。このように正式に主人から委託された羊飼いは堂々と門から入り、自分の羊の名を呼んで連れ出して先頭に立っていく。羊はその声を知っているのについていく。しかし、主人から委託されていない非正規な羊飼いは門からではなく、他のところから乗り越えてくると言われており、ここでは明らかにイエスとその敵対者の関係が言及されている。また、敵対者は盗人、強盗という言い方で厳しく非難されている。

また、もう一つ大事なことは、羊たちが夜休む囲いには、複数の羊飼いたちの羊が一緒に入れられ、一つ所に休んでいたという習慣である。パレスチナ全域にはそんなに多くの囲いは存在していないので、共通の囲いを複数の羊飼いたちが使っていた。この状況を踏まえてはじめて、10 章の以下のような数節の意味が明確になってくる。「門番は

羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(3節)、「羊はその声を知っているの、ついて行く(4節)」、「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている(14節)」、「(囲いに入っていない)その羊もわたしの声を聞き分ける(16節)」。

そして、「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出し……先頭に立って行く」という表現は、エジプト脱出の出来事を思い起こさせる文言で、聖書によく出てくる。このように牧者と羊のつながりは、長い間牧畜生活をしてきたイスラエルの民にとってよくわかるものだった。主人は羊の数がどんなに多くても一匹一匹に名をつけて把握していたそうで、羊も主人から名を呼ばれると、その声を知っているの、聞き分けてついて行った。

3. 主題とポイント

今日の福音書には二回の「はっきり言うておく」⁴という表現がある(1節と7節)。これは大事なことをいう時に用いる定型句であるが、一回目のこの表現の後には「門を通らないで入ってきた者」への言及、二回目後には「わたしは羊の門である」というイエスの宣言が続く。今日の福音の主題は、イエスが門であることと、その門を通して入る者は救われることが主題で、門を通らないで入ってくる者への厳しい非難はそれを強めている。次に、「わたしは羊の門である(10:7)」と「わたしは道である(14:6)」は非常に深い関係にある。“イエスが門であること”と“イエスが道であること”はヨハネの救済論にとって重要で、イエスという門を通して入る者、イエスという道を通して行く者は救われるという主張である。実際、14章6節でイエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と明言している。

イエスに従って生きる時、その生き方は必ず我々を救いに導くというヨハネの論点であるが、イエスの門、イエスの道が指し示すのは、イエスの価値観であるとも言える。大切なのはイエスが自身の生涯を通して示された福音という価値観を生きるチャレンジであろう。イエスの教えを完全に生きたという結果や功績が救いをもたらすのではなく、福音の価値観を生きようとするそのチャレンジと試み、そして何よりそのリスタートと継続的挑戦が私たちを救いに導くのである。それが、イエスが門であり、道であり、そこを通る人は皆、救いに導かれるということであろうし、そのように生きる者を牧者イエスは必ず救いへと導いてくれるはずである。

⁴ 直訳は「アーメン、アーメン、私は(あなた方に)言う」。